

兵庫県本部の新しい仲間と出会いに行くためのカラーチラシやSNSバナー(画像)をつくる「Canva(キャンバ)」活用講座が好評です。みんなで一歩前進する講座の様子を紹介します。

一人ひとりに目標がある

講座の魅力は、「スタンディングのプラスターが作りたい」「行動をSNSでお知らせしたい」「できる人に全部おまかせじゃなく、自分でできるようなトパソコンを開き、今



兵庫県本部

「班ニュースをつくるみたい」「体験会のチラシをカラーで」と、一人ひとりが目標をもって講座に参加していることです。最初からやる気と熱意があり、持参したスマホやノートパソコンを開き、今

集まって、聞き合う
キャンバ活用講座が好評!

か今かと待ち受けています。講座のスタートは、いったん落ちついて「しんぶんタイム」から。この日は、6月27日号の「次世代国会行動」の記事を読んで、

「次世代に届くようなバナーをつくろう」「カラーチラシも夢じゃない」と県本部から訴えると、一斉にパソコンやスマホに向かい、初挑戦が始まります。

講師は、東灘支部の前川さん(スマホ担当)と長田支部の中村さん(パソコン担当)です。2人とも3年前からキャンバを使い始め、前

Canvaは、オンラインで使える無料のグラフィックデザインツール。61万点ものテンプレートと、1億点の素材(イラストなど)あり、簡単操作でデザインを作成できる。



この日完成した作品(チラシ)を支部のSNSにすぐアップ!

川さんは体験会や憲法カフェ、学習会のチラシづくりで活躍。中村さんはこの数カ月、SNSに上げるバナーづくりを力を入れていきます。

注目される言葉も重要

SNSでは添える言葉も重要で、「だれでも参加できる」とよびかけたペンライト集会

で訴えたいこと、伝えたいことを最初に考えておくこと。あとは自分のセンスを信じて。絵柄もデザインも無数にあり、夢中になるとあっという間に時間がたちます」とアドバイス。

「ペンライト集会をデモカレンダーに載せるため支部のX(旧ツイッター)を5月に立ち上げたばかり」と中村さん。当日は飛び入りも多く、ティラノサウルスの着ぐるみも登場。発信することの大事さを実感。初めて講師を引き受けました。

さあ、作成! ポイントは? 前川さんは「チラシ

「字の大きさは?」「どこを動かす?」と声を掛け合っているうちに、あつという間の2時間。最後は、完成したチラシをプリントして、記念撮影。喜びがあふれます。

主張

会期末が迫る国会は、与党自民と日本維新の会による横暴な運営で異常事態となっています。両党は中道改革、国民民主、参政、チームみらい、日本共産党の5野党が抗議するもと、衆議院政治改革特別委員会で比例定数削減法案と「副首都」法案の審議入り

緊迫の終盤国会 民主主義破壊を許さない行動を

を強行、全野党が欠席する中、与党だけで審議をすすめています。2法案とも維新が強く求めたもので、連立維持のための党利党略でしかなく、民主主義の根幹にかかわる選挙制度を与党だけで勝手に決めることなど、絶対に許され

ません。最も民意を反映する比例の議席削減は、女性をはじめ多様な意見や野党の排除につながり、憲法の国民主権の原則にも反する、「独裁の道」です。衆参両院の全野党は2法案反対の法案も憲法違反です。国会前で、全国で、高市政権

作った名刺カードを渡して入会

1月の講座を受講した雲丹亀さん。支部委員会で「若い世代にアクセスしてもらおうには二次元コードがいい」と新しい支部委員からの新鮮な意見を参考に、支部のフェイスブックにつながる二次元コード付きの名刺を作成。

6月の「斎藤知事辞任せよ」のいっせい行動でのシール投票で対話した女性とさっそく名刺で連絡先を交換。翌日、喫茶店で話すと、少し前まで大阪に住んでいたとのこと。「維新新政治に怒っている」と盛り上がり、入会につながりました。

<月1回>

学校とジェンダーの現在地



男性性研究/教育実践家 田中めぐみ

男子校の授業で、「怒り」について考える時間をもちました。最初に視聴したのは、校内暴力が増えた小学校で、子どもたちが感情を言葉にする様子を追った番組です。生徒からは「小学生の頃にこういう授業を受けてみたかった」と感想が寄せられました。その後、自分の怒りを「大・中

・小」の三つのバブルに書き出すワークを行いました。しかし、「怒りを書いて」と突然言われても、なかなか出てきません。そこで私は「中くらいの怒り」として、「家で使った物が元の場所に戻されないこと」を紹介。大きな怒りとして、「もし自分の子どもが事故や事件で命を奪われたら、自分でいられなくなるほど怒ると思う」と話しました。すると、「それって怒りですか。悲しいんじゃないですか?」と生徒に問われました。

授業では、「怒りは二次感情と呼ばれることがある」と紹介しました。悲しみや不安、悔しさが怒りとして表れるという考え方は。確かに、大切な人を失った時にまず訪れるのは悲しみなのかもしれません。しかし同時に、「なぜこの子が命を奪われなければ

4 「怒り」の奥には何がある?

らなかったのか」という怒りもあるのだと、私も気づかされました。生徒が「家族を馬鹿にされた時は結構大きな怒りだ」と話し始めました。さらに、「家族の出自を否定されるようなことを言われた時」と言葉を重ねました。「自分の怒りはどれも最大級」という生徒は、意外にも「寝ると忘れるけど、貸したお金を返しにこない人は嫌だ」と話します。別の生徒が、「友達に借りたお金を返していないことを思い出した」と打ち明けると、「誠実に謝れば大丈夫」と励ましていました。授業後、その生徒は「一刻も早くお金を返すぞ」と感想に書いていました。他者の話を聞くうちに、自分の



屋上で(本文とは関係ありません)

記憶や感情が整理され、声に出して話したくなる瞬間があります。生徒同士が経験に耳を傾け、言葉を返し合う姿に、私も励まされています。こうした対話的な授業を、私がなぜジェンダー平等教育と位置づけているのか。次回、もう少しひも解いていきます。